

「今、私の晴雨計は！」⁽⁵¹⁾

「すごいトシヨリと一流の老人」

平山征夫

七月で74歳になった。来年は後期高齢者だ。漢字転換が間違っても私の場合は「高貴高齢者」はないだろ。ならばいつまでも「反抗期高齢者」でいよう。そんなことを考えながら本屋を覗いて改めて驚いた。若者よりまだ高齢者の方が本を読むだろうという販売戦略なのか、やたらと「いかに老後を生きるか」など年寄り向けの本が並んでいる。書店の一番良い場所を占領している。

タイトルで書ける男性はまずいないのは仕方ないとして、80歳代でも瀬戸内寂聴、佐藤愛子、曾野綾子、橋田壽賀子、下重暁子など多彩だ。若手でも阿川佐和子などがいる。これに対して男性は五木寛之の健闘が目立つくらい。あとは故日野原重明の再販が並んでいる程度だ。「大往生」のベストセラーのある永六輔が存命なら健闘していただろう。この中でも異常に多いのが曾野綾子だ。店頭に五く六冊並んでいて出版社も違う。良く見るとどれも今年に入ってから出版だ。「人生の引き際」「老いを生きる覚悟」「人間にとって病いとは何か」「納得して死ぬという人間の務めについて」「女も好きなこと

をして死ねばよい」「失敗という人生はない」「人生の値打ち」「死ねば宇宙の塵芥」と八冊続くから驚きだ。雑誌の連載をまとめて本にするのだろうかと思うが、瀬戸内寂聴三冊（「死に支度」など）、佐藤愛子四冊（「老人力」「役に立たない人生相談」など）、下重暁子四冊（「暮らし自分流」など）、五木寛之二冊（「人生百年時代のこころと体の整え方」ほか）橋田壽賀子二冊（「安楽死で死なせてください」など）に比べても多い。果たしてこれらの中から、かつての「大河の一滴」（一九八九年五月）のようなベストセラーがこの「老人本市場」（私の勝手な命名）に出るだろうか？

曾野の「夫の後始末」も昨年話題になったしかなり売れた。夫が亡くなった後、妻はどう後始末するのか、ちょっと気になったので調べようとして、間違って「夫の始末」で検索してしまった。すると田中澄江の本が出てきた。夫田中千禾夫との体験をベースにした自伝的小説だ。そこでアツと思っ使用って夫を殺害するという殺人事件があつたが、この妻が獄中で手記を書く時のタイトルはこれだなど・・・。沢山の作家と本のことを書いたが、これらの本を買って読んだことはない。生きる参考にはなるだろうが、気にかけていたら息苦しいのではと思ってしまう。読まないのではこれらの本が人生訓と

して役立っているのか、少しお節介が過ぎていいのかは判断できない。そんな私が老人について書いた本を最近2冊も読んだ。山崎武也著「一流の老人」と池内紀著「すごいトシよりBOOK」いう本だ。「一流」と「すごい」という言葉に惹かれたのだ。「一流とかすごい老人とはどんなのだろうか」と関心を抱いたからだ。山崎さんは、ビジネスコンサルタントとして国際業務分野で幅広く活動されてきた方だが、茶道裏千家に造詣の深い方で83歳。老年期は人生という行路の最後、ここを清々しく「安全」で「安気」に過ごすにはどう考え、行動したら良いか、「一流」の老人を目指す意義をまとめられたのが本書

だ。その中で山崎さんが勧められた生き方を幾つか列挙しよう。世の中とはバランスよく付き合う。いつも身だしなみは清潔に老人こそ秘かなおしゃれを。下品な人と付き合うと下品になる。子の面倒は死ぬまで見る。懐かしさを他人に押し付けない。利殖の話からは全力で逃げ出そう。儉約はしても交際費はけちらない。老後の勉強はあくまで余技と心得る。葬式や墓は遺族に全権委任する。面倒を運動に替える。記憶力が悪くなるのも悪くない。芸術鑑賞では作品との共感をめざす。老人は一転び一巻の終わりど心得よ。人生への執着はほどほどに。人に尽くして心に満足を。老人の自慢は聞く

に耐えない。一日一善を為し一日一悪を反省す。さすが一流になるにはバーが高い。いずれも尤もで心がけたいものばかりだが、いくつかの指摘は私には無理と感じ、「一流の老人」を目指すのは諦めることにした。それは、「パーティなどでも立食しないのが老人の矜持」とされているが、夕方のパーティでつまらない挨拶で待たされた挙句、空腹のまま笑顔で懇談するのは私にはかなり難しい。また「姿勢のいいのは七難隠す」と言われるが、妻に四六時中「姿勢が悪い」と叱られている私は既にこの点で失格だ。老人の恋は「忍びがたきを忍ぶもので、燃え盛ってはならない」と言われるが、その場になっ

て見ないと自信はない。「部屋は物置ではない」という。これが一番出来ていないし、死ぬまで無理だろう。教養を感じさせる少しの本を書棚に入れ、空間を大切にしたい部屋にするには、殆どの本を処分しなくてはならない。池内紀(やすし)さんは著名なドイツ文学者で優れたエッセイストである。この著書のタイトルは、ご自分が70歳になった時始めた老人観察や生活記録のメモ帳のタイトルで、ご自身の目標を表したものだ。だから「すごいトシヨリ」とはこういうトシヨリである」ということをまとめたものではなく、自分が老年期という下り坂を楽しく生きようとする日々の観察手帳。その中で老年期

を楽しく元気に生きる発見をまとめたものである。

鷗外を少しかじっている私としては、鷗外の「棕鳥通信」(岩波文庫)の編注者として尊敬すると同時に、エスプリの効いたエッセイも存じ上げていたので、池内さんが目指すすごいトシヨリって何だろうと思いつきながら読んでみた。池内さんらしい鋭く少し毒が効いた観察内容を少し列挙する。

のもいやと自分に疎遠になる

一般的に老人が不機嫌なのは新しい社会についてゆけず除け者にされるから 物にぶつかったり、カップを落としたり、メガネが無くなったり物は年寄りからかう 老いの進行を的確に知る(「老化早見表」掲載)

お金に振り回されない「治療をしない」を含めた老いの病への対応を テレビや家族、同僚、同窓から自立する コンビニや郵便局に行くにもおしゃれを 少年

時代読んだ本の再読の薦め オムツはするべし、されど「人生は麗し」です 治療より介護の状態
で死を待ちたい 望みは「自死」
(自分の死を語りた)

この観察記録を書きはじめた

時、池内さんは77歳で死ぬという前提だったのだが、今年それを超えたので、今からは自分寿命を三年ごとに更新してゆくそう。

「これまではどう生きてゆくかばかり考えてきたけれど、そろそろ自分の人生に自分でけりをつける終わり方があっても良いのではと思っている」と最後に記していた。「すごいトシヨリ」だけでなく、「変な年寄り」でもあるというのが私の読後感だ。

(平成30年9月25日)

